

Title	奥付
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1965
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.58, No.10 (1965. 10)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19651001-0173

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

◇次号目次(十一、十二月合併号)◇

奥井復太郎博士追悼特集

奥井復太郎博士年譜及び著作目録

追悼の辞

奥井教授をいたむ

平井 新

学を愛しんだ人

寺尾 琢磨

奥井さんを偲ぶ

有賀喜左衛門

奥井先生と都市社会学

大道安次郎

——都市社会学に残された大きな足跡——

論 説

生活水準国際比較の問題点

中鉢 正美

奥井博士と北九州市マスタープラン

小古間隆蔵

都市の生活と都市の構造

山 岸 健

都市社会学研究と奥井復太郎博士の業績

佐藤 仁 威

書 評

J・フリードマン
W・アロンゾ 編

『地域開発と計画』

高橋潤二郎

◇前号目次◇

論 説

第一インターナショナル形成期における

マルクスとエンゲルス(その一)

飯 田 鼎

——マルクス主義における民族、

井村喜代子

日本資本主義の再生産構造分析試論

北 原 勇

——昭和三五年「産業連関表」を

手がかりとして(三)——

アダム・スミスとエドマンド・バーク(三)……白 井 厚

——その社会観と経済思想をめぐって——

書 評

小島 清著

『日本貿易と関税引下げ』

深海 博明

——ケネディ・ラウンドの効果——

新刊紹介

昭和四十年十月一日発行

◎三田学会雑誌 第五十八巻 第十号

定価 一二〇円(送料二円)

東京都港区芝三田二丁目二番地

慶應義塾経済学会

編集人兼

代表者 遊 部 久 蔵

電話三田(453)二二一一
振替口座番号 東京四四〇五六

印刷者

東京都港区芝三田豊岡町八番地
図 書 印 刷 株 式 会 社

安 倍 七 郎

半カ年予約購読料(送料共) 七二〇円

一カ年 " " 一四四〇円

御希望の方は左記へ購読料を添え御申込み下さい。

東京都高輪局区内三田綱町一番地

発 売 所 慶 應 通 信

振替口座番号 東京一五五四九七

編 集 後 記

この編集集中に四十年度の経済白書が発表された。「安定成長の課題」と題している。一読してがっかりした。今回の不況は一九三〇年の世界恐慌前夜と様相がかなり似ているとして、最近さかんに研究されはじめた景気情勢とその先行に対する分析があまりに曖昧なためである。

白書は、今回の不況について、一面では従来と同様の短期の循環的性格をもっている把握している。しかし、他面ではこれまでにみられなかった、いわゆる「構造変化」が底流に進行しているとしている。また昭和三十五年―三十六年のブームの調整過程が尾をひいていると理解している。

現在の不況についての白書の分析は、どこに焦点があるのか曖昧で、きわめて不明確である。とくに、今回の不況が従来の短期循環不況と様相を異にしているという点の「構造変化」論と、高度成長の調整過程および三十九年の引締めの一重うし論とは、現象面の事実がばらばらに羅列されているだけで、高度成長と産業構造変化、この構造変化の景気循環に与える影響、それらの下での恐慌の発現のあり方等々の理論的・内的関連の把握が不明確である。

従来から指摘されてきた白書の「分析の曖昧さ」、「全構造の有機的把握のなさ」、「歯切れの悪い政策提案」等々の欠陥は、その「立場」にばかりよるのではなく、むしろ理論研究の不十分さにより大きい比重がかかるのではないだろうか。

(植草 益)